

三度の営倉入り

高知県 川崎 満 春

昭和十八年十二月一日、私は学徒動員で、大学在学中、くりあげ卒業をして、朝倉の西部三四部隊へ入隊した。そして、十九年四月に甲種幹部候補生となり、三重県で集合教育を受け、渡満、牡丹江の近くの寧安にあった満州第九七三部隊第二航空通信連隊へ、見習士官で配属された。

八月九日、私は週番士官であったため、衛兵所へ巡察に行くと、衛兵司令が、あやしい飛行機がとんでいったということ、よくしらべてみると、それがソ連軍の飛行機であることがわかった。連隊本部へ連隊長以下、将校全員が集まり、刻々はいってくる情報をもとに、ソ連地上部隊が進撃してくる状況を地図にかいて、戦闘状況を確認した。

やがて十三日、転進命令がだされ、安東むかうことに

なり、列車にのったが、この列車のなかで十五日の終戦のことを知った。この時、天皇陛下のお言葉ということで、涙をながされていたことが印象として強くのこっているが、職業軍人である連隊長の心情は、わかるような気もした。

途中トンキン城で下車し、徒歩で安東へむかったが、満人が暴動をおこしているという情報もあって、完全軍装で戦闘の準備をしていたけれども、襲撃などは受けず、まる二日間、徹夜で歩いたのには弱り、だんだん装備を捨て、最後にのこったのが銃と飯盒ぐらいのものだった。

兵隊は三十代から四十代の老兵が多かったし、私は中隊長代理という責任上、弱った部下をひっぱって、トンキン城から安東までの行軍は身にこたえた。途中夜中に、ノドがかわいて水を飲んだが、朝見たら、何と泥水であったこともある。安東へはいったのが八月二十日ごろだと思うが、はじめ小学校へ収容され、のち山のうえへ移動し、そこで天幕をはって、別にこれという仕事もせず、三か月あまりをすごした。部隊長は「わしは自決

するが、おまえたち若い将校は生きのびよ」と言っていたけれども、間もなくソ連軍に連行された。

十月のはじめにソ連軍がはいってきて、武装解除をうけた。そうして約二千人ぐらいで、奉天の収容所へ移動させられ、ここで約一週間ぐらいいて、それから一か月近くかかって列車で黒河までいった。昼は名も知らない駅の引込線で二日も三日もとまることがあり、夜だけ走るといくりかえしであったから、どこをどう通ったのか、私の記憶はさだかでないが、黒河からアムール河をわたり、対岸のブラゴエチェンスクについたのが十一月一日だったことはたしかである。黒河まで、荷物同様につめこまれた貨車の中でも、寒さが身にしみだが、ソ連兵は貨車の上で毛布一枚で寝ているのには驚いた。入った時、雪がふっているのに、子供はハダシで遊んでいる。

私たちはブラゴエチェンスクから歩いてシモノフカヤにむかった。そのあいだに待っていた荷物を食糧と交換し、だんだんと持ち物がへっていく。時計や万年筆の貴重品は、身につけているとすぐ取られるので、収容所の

てんじょうへかくしておく。するとソ連兵が検査という口実で外へ出されて、隠した物をとるまもなく、そのま別のところへ連れてゆかれる。このようにして収容所を五、六回かわったので、目ぼしい物はほとんどなくなっていった。

ブラゴエチェンスクからシモノフカヤまでは汽車で約五時間かかる。そこでの仕事は貨車修理で、ドイツ戦線でやられたガイ骨みたいな貨車が送られてくる。シモノフカヤでは、材木工場で枕木の製材もやった。川から径が一メートル以上、長さ五メートルの原木を、コンベアで引き揚げ、枕木を製造する。当時、収容所には約二千人ぐらいいて、私は六中隊の中隊長、百五十人の兵をあずかっていた。中隊をつれて作業に行く。作業場まで歩いて三十分。作業は三交代。八時から十七時まで、十七時から二十四時まで、二十四時から八時までとなっていた。食事は、二千人だから、なかなか大変。朝五時頃からはじまって九時頃までかかる。コウリャン、アワ、ヒエのスープで、晩は三百グラムのパンが支給された。普通で零下四十度、寒いときは七十度までさがった。

装備は零下二十度のものだから、体感温度はおして知るべく、ガタガタとふるえた。この寒さと飢えで栄養失調になり、毎日二人から三人がなくなつた。晩ご飯が終つてから、元気で故郷へ帰ろう、妻子が待っているから生きて帰ろうと話しい、松のアブラをたいて、わずかな明かりをたよりに朝の食事を分配する。「おい食べんか」とおこすが、おきない。何回声をかけてもおきないので、ゆりうごかしてみると死んでいた——ということうなことが何回あつただろう。

部屋の中はベチカをたいているが、それでも寒い。収容所内では軍服をきて寝てはいけない——ということになつてしたが、きなくては寒くてねむれんというので、私は見て見ぬふりをしていた。ところが収容所長がまわつてきて三回ほど注意された。しかし、私は兵隊が大切だと思ひ、だまっていたら、こんどはお前の監督不行届きということで営倉にいれた。

門の横に番人がいて、その向こうに営倉がある。そこへ放りこまれた。暖房はあるし、中隊から食糧を持ってきてくれて、待遇はかえつてよかつた。二回目の営倉ゆ

きの原因は、穀物倉庫へ作業にいくと麦がある。その麦をポケットに入れてきて、煮て食べる。何回も検査があつたが、そのたびにかしこくなり、帽子の中へ入れたり、袋を作つてズボンの前へかくしたり、靴の下じきへも入れたが、これが一番みつからなかつた。監督しておらんといふことで、これが二回目。次第に体力が減退してゆく。帰るためには生きていなければならぬ。ソ連の言うとおりの仕事をするなど仕事をするなど言つてあるので、ノルマがあがらない。そこで三回目の営倉ゆきとなつたわけ。

三回も営倉に入れられたのに、それでもまだ兵隊のことをかばっているというので、とうとう私人別の収容所へ送られた。そこはソ連に対する反動分子を収容するところである。二十一年夏のことであつた。

ここでの仕事は石切りや、ソフホーズへ収穫の手つだいにいった。ジャガイモやナマの大豆を取つてポケットにいれ、作業の行き帰りに食べたが、結構うまかつた。だから農場作業のときはいつも満腹感をおぼえた。

二十二年のはじめだつたか、日本新聞ができて、それ

に南海大地震のことが出ていた。室戸の灯台まで水がきたとあり、津波で海岸も全滅とあったので、うちの寺もやられたかと思ひ、絶望的になった。何回も帰してやるのだまされ、二十二年十月、帰国のためナホトカへ。ここでは民主化運動が盛んで、反動分子のつりあげや、にくまれていた者は密告されて、人民裁判にかけられた。なかにはまた奥地へ逆戻りする者もあって、一日一日が戦々きょうきょうの連続であった。やっと十一月二十日すぎに乗船したが、帰る気持ちがいかなかった。そして二十七日、舞鶴港についた。

穴倉生活数年

滋賀県 寺村 芳郎

昭和二十年八月二十二日、松花江をソ連軍が上陸用舟

艇でやって来ました。二日間ほど戦闘を交えました。先任中尉の戦死以外被害者は少なかつたようです。その後、原隊に帰り、牡丹江で武装解除を受けました。

十一月六日、ダモイ東京と言われ、喜んで貨車に乗り込みました。中は二段になっており、小さな天窓が一つあるだけの不安いっぱいの出発でした。どこを走っているのかサッパリわからず、指揮官に尋ねても知らないの一点張り、機関士に聞いても自分の運転区間より知らないようでした。が、列車は休みなく西へ西へと走っておったわけでした。

十日ほどたつて駅へ着きました。大きな海が見え、それがバイカル湖であることを知ったのはあとのことでした。そして一日中湖辺を走って、二十日間ほど行った森で下車、これがラーダの森でありました。収容所は独ソ戦当時の兵舎で、屋根だけ地上にある穴倉でした。宿舎の天井裏にライオンハミガキの使い古しがありました。これがだれの使ったものであつたか、あるいはノモンハンンの日本兵のものであつたか、不明でした。

その中にソ連の兵隊が、この兵舎にはドイツ兵が二千